

意義のある思い出を残したい

——亡き夫を偲ぶ鎮魂の旅を迎えて——

杉田 春恵

<解説>杉田春恵（すぎた・はるえ）さんは、1927年生れ。読売新聞に掲載された「日本人も同じ犠牲者」中国側が建立—という方正日本人公墓記事（「検証の旅」にも参加した徳毛貴文さんが執筆）を読み、大類の方に電話をいただいた。その後何度も会にカンパして下さっている方である。以前、会報に寄稿してくれとお電話をしたことがあったが、「いえいえ、そんなことは・・・どうぞ少しでもお役に立てれば」という言葉があり、ついぞお会いする機会もなかった。今回旅に参加したいが、からだのことも心配なので、介添え役として孫を連れて行きたいという。孫の啓輔さんは24歳の大学生。終始、杉田春恵さんを支え、その結果、全行程をなんなく支障もなく旅を終えられた。啓輔さんはロシア語を第二外国語として専攻されているが、初めての中国の旅を終えるなか、「中国語も学ぼう」という気持ちになったという。

この手紙は、出発する1ヵ月ほど前に行った旅の説明会のあと、大類宛に送ってくださったものである。文章を書くのは苦手だという杉田さんだが、手紙は当時の貴重な体験が綴られている。杉田さんのご了解の下、ここに掲載する。パソコン入力には森一彦さんの手を煩わした。

（大類善啓）

暑中お見舞い申し上げます。うだる様な暑さが続いて居りますが如何お過ごしでしょうか？

去る七月十四日の旅行説明会にはJRが遅れた為にぎりぎりの時間になっていましたので、初めてお目にかかりますのをご挨拶もせず本当に失礼致しました。

八月になり何やらそわそわした気分で、資料を何度も繰り返し読んで居りますが、なかなか頭にインプットできません。

昭和二年生まれの神田っ子も八十三才を過ぎ、久し振りに伺った小川町周辺は時折りテレビでは見ますが、私の育った頃の神田周辺の様変りに、迷子になってしまいました。

戦前の良き時代、忍ヶ岡女学校の二年生の時に太平洋戦争勃発、それからは軍需工場への動員勤労奉仕と何時もモンペ姿、十九年三月卒業、軍需工場へ就職し、十一月から急に米軍の東京空襲が目を追って激しくなり、一回目は日本橋、京橋、神田の吾が家の上空をヒューッズズン、ひどい地響きの怖ろしさに身震いしたのが忘れられません。それから連日空襲があり、田舎の有る人はそれぞれが東京を後にして行きました。私の夫が満洲から来たのはその二十四日、義兄からの遺言を持って来ました。

結婚のため満洲の白城子へ

義兄が関東軍第一師団に召集されたのは昭和十六年夏でした。そして孫呉に国境警備につい

ていましたが、十九年南方戦線が負け戦となり「山下奉文」にフィリピンへ転戦命令が下り、ソ満国境が空っぽになったそうです。

義兄は、自分もフィリピンへ行けば必ず戦死することになるから弟のお前が義妹の春恵と結婚して実家を継いで呉れと云う事だったのです。白城子から東京へ義兄の言葉を伝え、私の長姉に子供が出来ず出征してしまった義兄の無念を思い、私はまだ十八才なのに結婚に同意したのです。東京、日本全体が日に日に空襲がひどくなり、十二月三十日下関に着き釜山経由、ひかり特急の一等車に乗りました。元日の列車のお弁当は東京ではとてもとても目にする事の出来ないお料理でした。

白城子の社宅へは二日に到着、理事長の計らいで六日に満鉄の厚生会館で披露宴を、その時も中華料理が日本では考えられない程の素晴らしいお料理でした。

実のんびりと誰も「モンペ」もはかすスカートだったので、お隣の奥さん（山梨から嫁いだ方）と二、三人にモンペの作り方を教えて差し上げた程でした。夫の会社は、「興農合作社」と云って半官半民の食糧を扱う会社で社員も「満人、韓国人」が一緒に仕事をして居り、夫は自家用車ならぬ馬でした。白城子の西部に開拓団が有り、そこへは馬でまる一日かかると云って居りました。そこの方々は、どうされたのでしょうか……。夫は七月二十一日召集令状が来て出征して行きました。

突如、ソ連軍の攻撃

八月九日、朝五時頃いきなり爆撃が有り、空を仰いだ人達が「日の丸じゃないネ、ソビエトかな……」「そんな、日ソ不可侵条約が有るんだから空襲なんてする訳ないよネ……」。ところが現実十日に着のみ着のままの人が逃げて来て、駅に近い私共へ来られました。少し休んでから、白城駅へ次の列車に乗ると云って帰って行きました。「明日は我が身」とも知らず……。十二日真夜中、通化へ行って弾丸運びをするかも知れないし、途中何かが起きた時は皆で一緒に死にましようと思つた理事長の奥様はピストル（ブローニング）を晒に巻き、しっかりと腹に巻きつけました。何の情報もなく無蓋車に街の人々と一緒に、合作社の社員は一かたまりになって乗り込みました。年寄り、女、子供。男性は一人も乗ってない貨車です。すぐ隣には並行して軍人軍属が家財まで積み込んでいて私達の列車より何時間か前に出発しました。後日聞いた話では、通化へ行ったとか！！大変な思いをなさったとの事、その列車に乗っていた方から伺いました。

十二日夜中～十三日朝まで、どしゃ降りの雨で、無蓋車の中は水浸し、皆でその水を何とかかき出しました。十三日奉天に着き、理事長の奥様、妹さん二人が、「大連へ行けば知人が沢

山居るから、そこへ逃げて行きましょう」と云うので荷物をおろしかけました。「一寸待って、駅にも街にも人が一人も居ないなんて、兎に角駅員さんどころか人っ子一人いないのは変だワ、大連へ行くのは止めましょう」と云ってまた元の様に貨車に戻りました。つなぎきれない程の貨車は青息吐息、トンネルの中で止まった時はずっと熱気で死にそうになり、どうぞトンネルでは止まらないでと満鉄の運転手さんに祈る思いで、運を天に任せるしかありませんでした。けれど親切な機関士さんで、赤ちゃんの顔を拭いてやりたい、ミルクを作るのでお湯が欲しいと走って行くと、「ヤケドしない様に離れて!」と云って下の方から熱い湯を出して呉れました。あの運転手さんはどうしたでしょう!!

平壤で敗戦を知る

十五日は朝鮮と満洲の国境の山中で、もう皆疲れ切って口を開く人も無く、駅に着くと水を汲みにだけ走りました。ところが朝鮮国内に入ると列車の側を「日の丸ではない国旗」をかざし乍ら、苦々しい顔で私達を見やるので、私は何か変だ!と思いました。

やがて十七日、平壤に着きました。私ともう一人の妹さんとで停車場司令部へ走り、そこに居らした憲兵さんに「私達は十二日夜、満洲の白城子から貨車に乗ったまま、戦争のことも何も知らないんですけど、一体戦争も私達の家もどうなったのでしょうか?」と聞きました。するとその若い憲兵さんは、涙をいっぱい溜め乍ら無言で、十五日の「詔書下る」と右から書いた新聞を渡して呉れました。「エッ、戦争は負けて終わったんですか?」その新聞を持って走り皆に告げました。もう泣く力もなく無言で一点を見つめている人ばかり。夫を戦場に送り消息も解らず、家も財産も捨て身体ひとつで逃げのびて来た人ばかり・・・。

貨車は駅のホームに着かず線路の離れた所に停まり、とうとう京城駅に着きました。「国防婦人会」の襷をかけたご婦人が何人かで「お疲れでしたネ、お茶でも飲んで休んで下さい」と接待して下さいました。再び貨物に乗り込みました。日焼け、ススだらけの顔、自分の体だけで精一杯と云ったところです。

釜山の駅から、だらだら坂を上がって小学校校庭にやっと到着、好天に背負って来た荷物を庭いっぱい拵げ、そしてそこでご飯のお弁当が配られ、皆やっと笑顔になりました。二十日に乗船というのでまたあの来た時の坂を下り、港の待合所（コンクリート）に皆べったんこと坐って一夜を過ごすことになりました。ここ迄来ると日本に帰ることより「もうどうにでもなれ」と肝が据わってしまう自分を感じました。ウトウトとした時、隣に居た会社の同僚の方の奥さんが「杉田さん!!ちょっと由美が変なの!」。まだ一才に満たない女のお子さんです。私はすぐ坐りこんでいる人の中をかき分け乍ら、「どなたかお医者さんはいらっしゃいませんかでし

ようか？」・・・するとご年配の女の方が「医者ではないですが産婆ですけど」と私について来て呉れて、由美ちゃんのお腹の下に手を当てると、「お気の毒ですがこの赤ちゃんは二時間位前に息を引き取ってますネ」——泣き声ひとつ出さずに——。ママ達もみんなお乳になる様な物は食べてないのですから、丸々肥っていた可愛い由美ちゃんは餓死に近いものだったのでしょう。ご主人様は理事長と一緒に白城子に残っていましたので、奥様はとても心配していたので、どれ程切なく悲しかった事でしょうか。後で聞いた話ですが、翌日白城子を出た後、新京に暫く居て日本へ帰ったそうです。

下関駅で女子供を突き飛ばす日本の兵隊

翌日、日本から朝鮮へ帰る人を乗せて船が入港、その帰りの船（名前は覚えていません）に乗り、海を見ました。由美ちゃんの遺体はきれいな赤い着物をかけ、港のブリッジに置いて来ました。釜山の憲兵さんが近くのお寺に預けて下さるといっているので、水葬せずをお願いしたのです。船が沖へ沖へ遠去かるのにチラチラ赤い着物が眼に入り、悲しくて船上で抱き合っただけ涙を流して居りました。

二十一日、米軍が下関に上陸するというので、引揚船は島根県須佐沖に行き上陸用舟艇に分乗して上陸。駅からぎゅうぎゅう詰めの列車に乗り、下関迄やっと着きました。下関駅は日本の兵隊が九州周辺から帰郷するので大変な混雑。「アメリカは女、子供に優しいから俺達を先に乗せろ」とすごい剣幕で突き飛ばし我れ先に乗って行きました。また臨時の貨車が出たので、やっと乗りました。何処でどうなったのか、会社の方々とも別れ別れに。

二十四日、三鷹に着きました。神田の実家は三月十日の東京大空襲で焼けたのを知っていたので、父親の実家へ帰り着きました。頭は「スス」が積もり真っ黒に日焼けした顔は別人の様。姉は新聞でソ連の先陣が白城子も手中に収めたと報道していたので、もう死んでしまったと思い込んでいたようで、そこへ、ひょっこりきたない乞食の様になって帰って来た私を見て、声も出ませんでした。夫の稔が出征した事も、その時始めて知らせた様なことで、喜びと悲しみが交錯して居りました。八月二十四日は夫の誕生日、きっと義兄も夫も私を守って呉れたに違いなく、感謝々々でございます。

以上が私の引揚時の思い出でございます。

ですから、方正のお墓に祀られた方々の様に、またソ連の進入と共に戦車のキャタピラで大勢が踏み殺された話、あの本（会報の「星火方正」）で書かれているような悲惨な思いをなされた方々、南満洲から帰った人々からのご苦労話を伺うと、ソ連兵、八路軍、満軍兵を一度も見ずに日本へ帰り着いた私、そしてあの満鉄の十二日夜白城子駅を出発し釜山迄着いた貨車何十輛かに乗っていた人々は、幸運だったとしか云い様がありません。

シベリア抑留を経て帰国した夫

理事長ご夫妻も他界なさいましたし、私の夫もシベリアで三年半抑留（カザフスタン「アルマアタ（現在アルマトイ）」）後、ナホトカで脱走し、二十三年十二月最終船で復員して来ました。義兄はやはり、レイテ島で昭和十九年十二月二十六日に玉砕しました。ソ満国境に居ても、どうなって居りましたか・・・。

二十四年三月、夫、姉、私の三人で商売を始め、今日に至って居ります。夫の後継は長男が二代目、次男は姉の養子となり実家を継ぎ当社の専務として兄を助けて居ります。何やら取り止めのないお話を書きましたが、お解り頂けましたでしょうか？私がチチハル方面へ行きたかった事情、苦しみを乗り越えられた幸せ、何事にも動じない強さがあの時身に付いたお蔭で今日が有り生きて来られた自分。そして報恩の思い感謝の念を、八十三才の現在、これからも持ち続けて行きたいと思つて居ります。

亡夫も中国人からロシア語を教わり、抑留中に隊員を体を張って守つた話。ナホトカで脱走、要塞地帯とは知らず九月末の寒さに火を焚いた途端にソ連兵に囲まれ、隊長の所へ連行され一週間営倉に入れられ、戦友たちの所へ戻つた時には、当然殺されたと思つていた杉田、豊田が帰つたと皆大喜びして呉れたそうです。十二月、作業の途中で二人だけ呼ばれて乗船、所長は約束通り帰国させて呉れたそうです。

アルマアタの収容所の頃覚えたロシア語が、本当に役にたったし、小さな黒パンと塩汁（スープ）ではこの様な重労働は出来ないと所長にかけ合い、仲間を助けて貰つた話とか、後で復員して来た戦友の話を聞きました。隊長は絶対に部下達を守る立場の者だと云う信念を持って居りました。

現役の兵隊として水戸の工兵学校から中支、南支、北支、満州で除隊、チチハルに落ち着いた後、就職。興農合作社で中国語が出来るので大勢の中国人と仕事が出来たと申して居りました。

今度の旅行も夫が一緒だったらなんて考えますが、七年前に他界、八十六才でしたから無理な話です。夫の分もこの旅を、意義のある思い出を残したいものと念じております。何しろ八十三才ですので無理は出来ず、孫の力を借りて参加させて頂きます。

大類様の様に素晴らしい文章は書けませんが、私の思いを一気に書いてしまいました。ご判読頂けましたでしょうか？ 申し訳ございませんでした。お許し下さい。皆様方の足手纏いにならぬ様、頑張つてついて行きますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

まだまだ暑さが続く様でございます。くれぐれもご自愛下さいます様お願い申し上げます。

八月五日

かしこ